



自由と創造 (上から時計回りに)陶芸家として成功した岡田加里、寒い冬にも外出したくなるほど楽しい「地下都市」、伝統的な建築物の魅力が残る街並み、地元のカラリアーで旅行日記を展示した青木義乃



化が見事融合し、北米にいながヨーロッパの魅力を味わえる。ブライト地区から西に向かえば、マギル大学の学生が英語を話している。東に向かうと、カフェナテを注文するフランス語が飛び交う。耳を澄ませば、もっと新しい移民の言葉も聞こえてくる。

「ここではあらゆる言葉が使われていて、(異文化にも)寛容だ」と、大阪出身の風景画家、横山雄二(50)は言う。だから安心して芸術に集中できる」

28歳のグラフィックデザイナー、青木義乃には、その気持ちがよくわかる。芸術の魅惑のためモン

トリオールに来るまでは、スケッチブックを他人に見せたことがなかった。だが、今では地元のカラリアーで挿絵入りの旅行日記を展示している。

「日本語なのに、みんな興味をもってくれて」と、青木は言う。「おかげで創造的なことを試す自由がある」と、これは「冬のひどい天気」の理のめりだ。

リー・エドガ



モントリオール [カナダ]

「北米のパリ」は芸術家にやさしい

最先端アートを中心地は多文化がキーワード



MONTREAL



人口 181万人(1120人)

気候 夏は過ごしやすいが、1月は氷点下15度程度まで冷え込む

見どころ ノートルダム大聖堂など歴史的建造物は必見。冬には全長約30キロもある「地下都市」で楽しく過ごせる

食文化 フランス語圏だけに、フランス料理店が多い。パン屋やカフェもたくさんある

特徴 カナダで2番目に移民が多い都市。ジャズバーやギャラリーが多く、外国人アーティストの作品を展示しているところも

間田加里(38)が初めて陶器のつぼを作ったのは、9年前のことだ。勤め先の製粉所に、ろくろとろくろがあつたら試してみた。長い1日が終わった後で(ろくろを回すと)心が安らいだ」

それでも郷の岡山県原市にいたころは、陶芸はただの趣味でしかなかった。その意味合いが変わったのは97年、カナダに移住してからだ。

「カナダに来たのは、通訳になりたかったから」と、間は言う。「でも、陶芸の講座に通うことを勧められて、すべてが変わった」

彼女に陶芸を習うことを勧めたのが、今の夫である画家のフィリップ・アイバソン。2人は結婚後、カナダ東部のニューブランズウィック州に住んだ。そこで彼女は陶芸の腕を上げていったが、じきに夫妻はもっとリベラルでダイナミックなアートの街に住みたいと思うようになった。

それが、ケベック州のモントリオールだった。「モントリオールはアーティストにとって素晴らしい」

それが最もよく表れているのが、ダウズ川の北にあるブライト・モン・ロワイヤル地区。あらゆるエスニック文化が混在し、最先端アートのギャラリーが並ぶ革新的な若いアーティストは、そんなパンキールド場所と吸い寄せられてくる。

アーティスト向けの助成金もたっぷり

セントローレンス川の中州にあるモントリオールは、フランス語圏としてはパリに次ぐ世界第二の都市だ。フランスとギリスの文